資料 2-4

# 知事・市町村長地域懇話会での
# 通学区域制に係る各市町村の意見

**※通学区域制についての発言のみ抜粋（発言順）**

日時　　2024/01/09 12:00-14:00
場所　　鳴門市ドイツ館（鳴門市大麻町桧字東山田５５－２）
対象市町村　　徳島市、鳴門市、小松島市、吉野川市、阿波市、勝浦町、上勝町、
佐那河内村、石井町、神山町、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町
※下線：通学区域制について発言があった市町村

## 【石井町長】

この学区制の議論、こういう場で取り上げていただいて、本当にありがとうございます。後藤田知事からも「結果を出す」というような冒頭。非常にこう力強い御発言をいただいて。それで、この学区制の議論については、すでに、すべて出尽くしている感が、私自身の中にはあります。

行政には作為による不利益と不作為による不利益と両方、行政を行っていく中では、共存していることだと思います。そこで、この学区制をいつまでも残しておくことが不作為による不利益を子どもたちに強いていることだというふうに思っています。今、県教育委員会さんは、各地元の学校の魅力向上というところで、魅力ある学校づくりに取り組んでいますが、この魅力ある学校づくりというのは、決して枠の中で守られた中で、魅力を作っていくのではなくて、やはり適正な競争のもと切磋琢磨するからこそ、魅力ある学校というのは出来上がってくるのではないかというふうに思っています。

この間、地元名西高校が百周年を迎えられまして。非常に素晴らしい学校であります。名西高校の通学定数、この間、県議会の県議の方に質問していただきましたけれども、定員数が非常にこう激減をしております。県下で一番激減しているといっても過言ではないくらい、普通科の定数が削減されております。石井町の子供たちは約 200 人、その１学年におりますけれども、200 人中 40 人,50 人しか地元の高校に通うことができない。

それで、残り 150 人は教育委員会さんがおっしゃっている不本意な遠距離通学を強いられているわけです。で、これは不本意な遠距離通学というのは、これはどこか特定の地域だけが強いられるものではなくて、やはり学力で、点数で、その入る学校を決めている以上ですね、やはりその学力に見合った高校を、子供たちが自分自身の判断で選ぶことができるというのは必要なことではないかと思っています。加えて、その子供たち高校まで徳島県でぬくぬくと育って、いきなり大学に入る時に全国と競争しなきゃならないよと。これこそ、子どもたちにとって酷な話ではないかと思いますので、やはり他の都道府県でもほぼ半分以上、都道府県が学区制を廃止しておりますが、やはり他の都道府県同様、徳島県も全国に競争できる子供たちを育てていく。そういうことも踏まえて、やはりこの学区制は早期に解消すべきだと思っています。

この学区制ができた背景っていうのは前回にも申し上げましたけれども、非常に当時の経済状況、インフラ状況、それから学生の数、そうしたものをすべて相まって、この学区制というのが出来上がったと思っています。学区制撤廃したところの資料をいろいろ見ましたけれども、すべてそういう時代にも適合しなくなってきたというところで、見直しが図られております。見直しといってもスピード感を持って会議をして、１年以内には結論を出して。それで、１年間置いておいて、３年後からスタートする。そういう期間を踏まえても３年あれば充分可能だというふうに思っています。

後は、本当に子供たちのことを思って、いかにスピード感をもってやるか、我々の１年と、子供たちのその１年、全く違うものでありますので、小さい子どもたちの立場に立っ

ていただいて、この学区制について、真剣に向き合っていただければ幸いだと思いますし、また私どもできることがあれば、できることを精一杯やらせていただきます。
　ぜひ前向きに実現できるように取り組んでいただければと思っています。

## 【板野町長】

　学区制は一つの課題ということですが、この学区制をいわゆるピンポイントでやっていただいて本当にありがたく思うわけでございます。この学区制につきましては、鳴門市さん、石井町さん、私ども板野町ということで、この平成30年に、要望もさせていただいております。その後、城東高校が全県一区になるなど、そういったことは、（通学区域制見直しの）スタートの一つかなと思うわけでございます。
　しかしながら、徳島北高校、城北高校、城南高校では、まだ学区制が、昭和47年から総合選抜という形から続いておるわけでございます。これが50年間続いておるわけでございますので、是非ともやはりこの子供たち、中学生の進路の確保ということで、非常に大事なことでないかなと思いますので、ぜひとも、この学区制の廃止をお願いをしたいと思います。
　特に、私が言いたいのは、学区内と学区外との差でございます。学区内であれば、例えば300点、学区外であれば430点必要でございます。その130点の差、流入率は12%と引き上げていただいておりますけれども、例えば板野中学校からであれば、430点取れてないからあきらめるわけでございます。そして、自分が行きたかった学校でも、違う学校になるわけなんです。
　現実としては、そういったこと学ぶ機会ということが非常に大切なことでございますので、是非とも今、この子供たちに、いわゆる本当に意味ある子供でございます。これから、是非とも、そういった形でお願いしたいと思うわけでございます。

## 【鳴門市長】

　先ほどから石井町長さん、板野町長さんからのお話がありましたとおり、私の立場は同じようにですね、「廃止をしてもらいたい」や「廃止をするべき」であるという立場であります。平成30年から、こういう要望等をしてきましたけども、いよいよ先ほど知事の方からですね「結果を出す」というような形ですので、ぜひもう一度聞いていただけたらと思います。
　この議論の中で、まあお話をですね、子供たちにこの議論を聞いてもらって、納得すると思いますか？っていうのがまず一つです。我々がやっているのが大人というか、行政の立場、教育委員会からの立場の中で話をしています。けれどもこの話はですね、多分子供さんにお話をしても絶対に理解していただけないのではないかと思います。
　ですから、もしですね。これを子供さんたちに納得させていただけるような、そんな議論がこの話できるのかっていうのがまず一点。
　そしてもう一つ、50年前の制度です。紆余曲折、変更しながらなんですけど、当時、これが入った経緯っていうのはもう十分わかります。でも、これだけの人口減少とか経済的な状況、そして今はですね、もうスマートフォンが手にあるというような。こんな状況の中で、今まで通り50年前の制度をですね、続けていくこと自体どうなのかっていうのも一点。
　もう一つ、知事さんが、ブラック校則の話をよくされます。
　校則も、過去においてはそれなりの効果があったけど、じゃあ現状のこの現在においてその校則自体がしっかりとですね、全然とはいいませんけど効果があるのかということです。それはやっぱり見直していくべきなんだということです。ですから、社会がどんどん

変わっていく中で、やはり必要なものは必要として残すためにいいのですけれども、それ以外のものっていうのは、やはりその学区制だけではなくて、どんどん変えていくべきだろうと思います。まず、環境が変化しているということ。

それともう一つ。私、この前、バングラデシュに行き、話しをする中で、こう言われました。外から見る日本っていうのはなんていうんですかね？ビニールハウスで守られてますよと。全然競争とかない。ビニールハウスであれば、風が吹いても全然大丈夫。雨が降っても大丈夫。でも自然というのはそうではなくて、風も吹くし雨も降る。そこでどういうふうに考えていくか、対応していくかっていうのが、人間成長していくことであり、日本では、ずっと守られているわけじゃないですかっていうことですね。そのようなことを言われました。

まさにこの学区制もその一つであって、守られる子は残っていくのはいいけれども、じゃあ守ってくれない、先ほど石井町長さんもおっしゃったけど、いきなりこう大学、社会人になった時に、そういうふうな「体力がない」「考えがない」「私は守ってもらえる」っていうのは、ないのではないかと思っています。これに集約するわけでもないのですけど、今はまずですね、我々がやってきたことは、これは外してもらう。それで外して、そしてその中でまた不都合があれば、そこは行政、教育委員会がもう一回ですね、違う形式を入れていくという形にしていただけたらというふうに思っています。

最後に、富山県がですね、学区制の廃止を決めました。去年です。去年決めていつからするか？令和６年です。先ほど石井町長さんは３年ぐらいの話でしたけど、やるところはそういうふうにやっています、決めてすぐに。

子供たちの時間が非常にもったいないし、有意義に使わせてあげなければいけないと思いますので、ぜひいろいろ話をさせてもらったのですけど、子供たちを納得させるようになる。そして子供たちが、意欲を持って勉強するような、そして子供たちに選ばれるような学校を目指してもらいたいと思います。

ぜひよろしくお願いいたします。

## 【勝浦町長】

勝浦町では、どんどん計画も進めておりまして、高校進学の選択肢を広げるという意味合いからは、高校生の就学支援というのを令和５年度から始めております。これは、高校生一人当たり一年間 10 万円というお金です。先ほど申し上げたように、家庭の経済的な例えばこうなんとか克服できないかというような意味合いで、一人に当たって 10 万円を就学支援しております。

この根本となったのは学区制であり、勝浦町から、行くっていうのは、まず公共交通機関で言いますと、小松島、そしてその後、徳島の方へ、今、民間のバス、公共バスが走っております。それを利用しているんですが、学区制があるため阿南方面への生徒が増えてきている。これに対して、通学支援の補助金なりを図って、タクシーの運行等をやっていたんですけど、それもなかなか、学校は決まった時間等、それぞれ開始になりますので、不便になり、なかなか利用頻度が低くなってしまう。それから、徳島まで苦労して通っている子どもたちには支援がないというような意味合いからも令和５年度からは一律 10 万円っていうのを、いろんな学校に通えるというようなことに役立てていただこうということで始めています。

こういったことから言いますと、少しでも選択肢は広がったのかなという風には思うのですが、やはり、勝浦町の場合は、公共交通機関からいいますと小松島市、その後、徳島市というような通学の路線が、一番経済的にいいのではないかということです。そういった意味合いで、学区制の廃止を希望するというか、願っているところでございます。

## 【小松島市長】

皆さん、おっしゃるようにですね。希望する学校への公平な進学機会を確保する観点と、今後の少子化の動向からは学区制を見直す必要性はあると考えます。ただ、一方で、本市は、小松島市が含まれる現在の第一学区は市内にある小松島高校のほか、阿南の、富西、富東の方にも通えると選択肢があるわけでございます。

非常に、皆さんと比べては、選択肢は多いのではないかなと思います。

また、学区を変えることによって、本市小松島高校があるわけでございますけれども、地元校区の地元の子供たちが行きにくくなるのではないかなと。例えば徳島市から、小松島高校に通う子が増え、受検する子が増えるということも考えられるのではないかなと、思いますので、小松島高校を抱える本市といたしましては、学区制の見直しだけではなく、人口減少における高校再編のあり方や学区内の流入率の見直し、また、全県一区校を増やしていくなど、そういうことをまず考えていく必要があるのかなと思っております。

## 【徳島市長】

最近、私も中学生と結構、給食のランチミーティングをする機会が増えていてですね。中学生にこの学区制についての議論をどう思いますかというようなお話をさせていただいております。

その際に、やっぱり私たちの地域には鉄道の駅もなくて高校への通学手段は自転車に限られるであるとか。あとは学区制を見直しすると、ほかの地域からの受検生が増えたら競争率が上がって遠くの高校へ進学しないといけないのではないかというような切実な不安の声もいただいております。

また、令和元年にも学区外からの流入率の緩和を行った時にも、学区制について大きく関心が寄せられていたところではあります。その時からも、引き続き保護者の皆さんとか市議会からも、学区制が廃止されて遠距離通学を強いられる生徒が増えて、時間的、経済的負担が増大するのではないかというような、不安の声が聞かれておりますので、もし学区制を変更するということになるのであれば、ぜひ丁寧な説明を求めていきたいというふうに思います。

## 【石井町長】

学区制ができた法律の背景、前回の市町村長会議で申し上げさせていただきましたが、「交通網が整っていない」、それと「経済的格差がかなり大きい」であと「子供の人口が非常に多いので、区割りをしなければ子供たちが溢れてしまうだろう」っていうのが大きな基本となって、法律ができたというふうに承知しています。それが、平成１３年、おっしゃるように国会でも議論になって、「時代遅れじゃないか 」っていう議論になって、平成１３年にその法律が廃止されて各都道府県で決めていいよっていうふうな話になったと思うのです。

それで、今までの議論を聞いていますと、法律があったからやっていた、あるいはなくなったけど、半数以上県外がやってないから、徳島県やらなくていいんだね。こうではないと思うんです。交通インフラも整ってますし。先ほど野上町長さんがおっしゃられた、あるいは小松島市長もおっしゃられた、不本意な遠距離通学を強いられるかもしれない。内藤市長さんもおっしゃった汽車がない鉄道がないところもある。これはどの地域いってもないところっていうのはあるんです。

だから、まず、こうスタートラインを同じにしてあげて、行くまでのその移動手段を考

えてあげるっていう方がより建設的なんじゃないかなっていうふうに思っています。そうでなければ、学力で入るのではなくて、もうその学校から半径5キロ以内の生徒は全員その学校に入れるよっていうような義務教育と一緒みたいな感じにしなければ、これは全く不公平だと思うんですよ。

例えば、ここに家があると。ここが例えば、ドイツ高校だったとして、そのすぐ100mとかにある家の方がここ入りたいけど、ここ入るには400点いるってなったら、この子は300点では入れないんですよね。これは不本意な遠距離通学じゃないですか。学力で決めている以上、その学力がある子がその学校に入るっていうのは、これはより公平な平等ではなくて、公平な教育の機会を与えることに繋がるのだと思うんです。教育は平等じゃないですよね。公平にやっていく。義務教育は平等ですけれども、公平な教育の機会を与えるというのが憲法に定められていると思うんです。さまざま懸案事項があると思うんですが、そういう懸案事項っていうのは、廃止したところは、全部クリアをして廃止をしています。

今、石井町も来年度から、プールについて、プールは各小学校にあったんですが、それを一つの民間施設の石井ドームがありますので、そこに小学校の子供たち行かせて、各学校のプールの維持管理費を含め減少させると同時に、泳力の向上を求めているというふうなことをしようとしておりますが、かなり反発もありました。学校のプールは在るべきものだろういうふうな反発もあったんですが、先日、見に来てもらったら、すぐに先生方からオッケーをいただいき、教育委員会からもオッケーをいただいて、クリアして、次年度から試験的に行うようになりました。

ですから、最初やるって聞いて知らないから怖がっているっていうのはたぶんあると思うので、まずその廃止したところとかを視察に行っていただき、有識者の方にも視察に行っていただいて、例えば、我々も視察に行くなど、前向きに考えていった方がいいのかなと。子どもたちのためにいいのかなと思いますのでぜひその点、前向きにやっていただきたいなと思います。よろしくお願いします。

## 【佐那河内村長】

全体的な話になるのですが、学校は、地域にとって、非常に大きな資産なんじゃないかと。それぞれ郡部も学校持っているところがあるので、非常に資産だと思うのですけど、この学区制廃止によってですね、生き残れない高校が出てくるのじゃないかということが一番危惧されます。ということで、進めるにしてもですね、とにかくその状況がみんなの地域の衰退を加速させることにつながりかねません。ついては、各校の生徒数の推移を注視しつつ、緩やかに進めていただければと思います。

## 【上勝町長】

公立学校、交通は公共交通。全然公共じゃないですよ。見放されてるってさっき言ってる。ハンデを背負ってるんです。学校もまだハンデを背負えっていうのがずっと続いてきたんです。上勝町、一生懸命、極端に言えばＩターン者、Ｕターン者を引き受けるために人口減と戦ってますよね。それはもう全部すべて同じだと思いますけども、そういった努力するのが学区制であることによってぽしゃっと消える。上勝なんか学校ありませんからはっきり言いまして、高校はありませんから、一家で出て行ってしまうんですよ、中学校から。学区制があることによって、昔はやっぱり子供さんが3人4人と居ましたから、一人の長男のために出ていくということができなかったんですよね。今１人っ子とか2人っ子ですから、平気で出ていくんですよ親がついて。一生懸命Ｕターンして集めてきても、どかっと出ていかれる。それは何でですか？って聞いたら、学校の近くに住所をおいて中学校に通ったら入れるからです。それ、公立の学校ですかって言いたい。

そういう選択を世の中がみんなするのであれば、逆に、先に市内の方がぐんぐん入ってくるって言いましたけども、郡部から入ってくるのが嫌だと、徳島市から離れますか？っていうことです。中心部から離れますか？上勝はできないから離れてしまうんです。はっきり言いますけど、町から。そういったことも考えた上でやらないと。知事がおっしゃいましたけども、地域の衰退があるのか学区があるのかって言いますけれども、存続がかかってるんです、我々は。

こういった問題一つにしても、だから一つ一つクリアしていって、ハンデをなくしていく。確かに僻地ですから。公共交通がないから上勝町、町営バスしか走っていません。徳バスも来ていません。だけど挑戦してできるだけそれをカバーする。よそもやってますので。公共という名でいく、公立という名でいくのであれば、やっぱりハンデはなくしていただきたい。

## 【小松島市長】

先程来、本市は小松島高校があるということをお伝えしております。皆さんご承知の通りだと思いますけども、昔、小松島高校からですねえ、すごくいい大学に、進学しておりました。東大行ってる人ですね。阪大とか神戸とか横浜とか入学している生徒が多くいらっしゃいます、先輩たちで。

今、現状はどうかわかりませんけども、おそらく、減ってきてるのかなと思うんですよ。皆さん、地域、例えば鳴門市で鳴門高校があったり、野球で有名だから鳴門高校に行きたいという人もたくさんいると思うんですけれども。小松島高校で、理数科とか徳島市立高校みたいに一クラスだけでもですね、進学クラスを作っていただければ、誰も城南とか、ほかの高校に行かなくなるのではないかなと思うんですよ。だから、そこら辺の偏りがですね。今、城東高校とか城ノ内に対して加配、加配はしてないかもしれませんけども、先生の質を上げているのではないかなと思うんです。ですから、例えば各地域の学校、うちだったら小松島高校に対して、ここのそのような一クラスに入ったら、いい大学に行けるんだよ、学力向上につながるんだよっていうふうなことにしていただければ、誰も小松島高校に行かなくて、徳島市内の高校に行きたいということを思わないのではないかな、と思います。ですから、その先生方の、教育力を上げていただくっていうことが一番ではないかなと。私は思いますので、またその辺のところも考えていただければと思います。

## 【鳴門市長】

すみません、小松島市長さんの理数科とか特別なクラスとかの話なんですけども。実は私、鳴門高校の理数科にいたんです。あったんですけど、結局、理数科なくなりました。なくなっちゃいました。やっぱりですね。鳴門の特殊事情があるのかもわかりませんけど、望むのはやっぱそういうふうなことも必要だと思います。必要だと思いますけど、それは学区制とはあまり関係はなくして、今後、これから特徴のある学校とした時に、小松島高校にはこういう、例えば鳴門高校であれば鳴門教育大学がありますので、教師になるなら鳴門高校みたいなキャッチフレーズでですね。で、そのような子を集めていき、鳴門高校へいって、近くの鳴門教育大学との連携をとっていくとかですね。

それの良い典型がですね。普通科高校ではないですけども、渦潮高校がすごくいい学校になっているなって思ってます。スポーツやるなら渦潮高校っていうようなキャッチで皆さん方が来ている。県内もそうですけども、県外からも来ているっていうことなんで、賛成はしますけど、それは学区制もはずした中で、それぞれの特色を持った高校ですね。できたらいいかなというふうに思いますので。自分がその経験したもので、やはり競争がです

ね。ワンクラスよりも多くの人たちと競争する方が学力が上がっていくのかなとは思います。経験上の話で申し上げたんですけど。

## 【松茂町長】

松茂町民にとっての教育のあり方というところで一つ考え方は、かつて「ゆとり教育」っていうのがありましたよね。あの時の教育を受けた今 30 代の方もいらっしゃいますけど、今、社会でどういった活躍をしているかっていうところまで、ちょっと考えています。今後はですね、こう、今までの教育がはたして合っているのか、いの一番に「ゆとり教育」がはたして実際にどれだけ国を変えたのかということを考えて、今の社会に求められている人間像っていうのはどんなものかっていうのも考えて、教育のあり方の見直しをやっていかなければならない。これからは“考える力”を養成していかなければならないという形を打ち出して、見直していくのが一番である。

今、県の教育長の考え方は、「国からの指導方針をどれだけ守ってやっているか」ということだけのようにしか、私には捉えられません。ですから、正味、徳島県の子どもたちをですね、「どんな形に導いていけばいい子供ができるか」っていうことを再建の中で考えていただきたい。そう言いながら知事もですね、「これからはこういう子どもを育てていかなければならない」という思いでも言っていただかないと、教育長の考え方は「国の方針を守りながらやっていく」です。今は反対に、学校の先生を守ることばかりしか言っていません。

私の考え方の中では、学校の先生というのは、ちょっと違うところの「聖人職」やなあというように考えています。世間では、「今は学校の先生、守れないから大変やな」ていうことになってますけど、そこはですね、やっぱり「神聖な職」として、どれだけ進路が見通せなくても、徳島県の子どもを、どんな方向に、いい方法に、導けるかということも考えていただきたい。

今後、競争が必要だと思うんだったら、「全員一緒の形でどこにでも行きなさい」というところは疑問です。そこらはやっぱり基本的に「どんな子供に育てていくか」というところにかかってきますので。ただ単に国の考え方、教育をそのまま行えばいいのかどうかっていうのは、私はこの「ゆとり教育」の時に間違っていたと思っていますので、今の社会が要望するような子どもを育てていかないといかんなというところに、これから考えていただくっていうのも一つの方法と思います。これは、一つ方法です。

そういうようなことを議論していただいた中で、徳島県、全部の子どもをどのような教育をするかということに考えていただいた中で、見直しをやっていただきたいとそのように考えますので、またここはよろしくお願いしたいと思います。

## 【北島町長】

いろんな議論があると思いますけど、はっきり言って小学校はですね。各市町のそこで教育しますよね。で、今、今日、議論になっているのは高校というようなことでですね。やはりこれ県のレベルということになります。もう一つ上行くとですね、国のレベル、これは大学というようなことになりますね。結局、徳島県の高校を卒業した進学を望む人がですね、徳島県内で居るのが少ない、外に出ていってしまう。これはそのレベルレベルでですね、考えることはみんな違うと思うんですよね。たまたま今日は高校ということでやっております。私も７５になりますので。私が中学校の時、その時にはですね。やはり県内ではトッププラスは城南、城東、城北。そんな状況がありました。その中でですね、北島町その時は 230 名ぐらいいたと思いますけども、上の 10 人ぐらいしかですね。城南にはいけない。次 30 番目ぐらいまでが城東に行く。城北はですね。70 番目ぐらいまでは城

北に行けた。そんな時代がありました。そういったものをですね。ずっと考えながら今のような状況になったんじゃなかろうかなと私は思っております。その時にはですね、徳島北高校もありませんし、市立高校もありませんでした。いろんな形でですね。人が増えてきた時にはですね、段々段々と、高校も増えてきたと思います。しかしながら、これから考えていただきたいのはですね。県の人口がですね、この前の話では48万人になってしまう。そんな状況の中で、じゃあ今のこの高校自体がですね、生き延びることができるかどうか、そういったとこまでですね。十分考えていかなきゃいけないんじゃないか。またやはり地域、地域ですね。今、我々、市町村でですね小学校は、やっぱり歩いて行ける範囲。そういうところでやっぱり通うっていうのは、これが一つの当たり前のことなんですね。そうなってくると高校もですね、場所によってはそういうことも考えていかなければいけない。じゃあ本当にですね、先ほどから言ってますが、いろんなことでですね、足を確保できるのかどうか、現実的な論理で考えていただかないと、ただ単に理想だけでは、なかなか乗り切れないところがあると思います。

全然話変わるかもわかりませんけど、この前ですね。大塚製薬、大塚グループの話の中で、AIを使うっていうAI関係の非常に詳しい方が言われておりました。今、一所懸命、小学校からずっとこう積み上げて、知恵を頭に入れてますね。いずれひょっとしたらですね。こんな小さなチップを、人間の頭の中一ついれればですね、その人間は、大学院でも卒業したようなそういうものが頭に入ってくる時代がくるかもしれないということです。近未来を見てるようなことでしたけど、本当に教育っていうのは、何を教育するのか、ただに知識だけを教育するのかどうか。もっとですね、人間性を教育するのか？その先生がおっしゃるのは、最終的に人間っていうのはもっとですね、感情的なそうしたところが発達するんだ。最終的な目的なんだと、いうようなことも言われておりました。非常に難しい話ではありましたけれども、これからのですね。教育というのはどういう形でいくのかね？、本当にちょうどこうした機会ですので、皆さんで考えていただいてですね。しっかりとやはり徳島県全体で、この教育問題について考えていけるようなことになってくれればありがたいなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。